慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 一千八百三十二年版ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン著 国家経済研究
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.11 (1938. 11) ,p.1539(73)- 1553(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19381101-0073
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19381101-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

呈出々版し、使節にも隨行した若山儀一が、十年の譯出になる「自由交易穴探」の「廣告」（序文）に於て、

「且保護政策を主としたる書類にても傑利（ケーリー）のは大部に過ぎ私密斯（スミス）外務省に昨年まで傭越兒土兒（エールトル）（註William Elder）のは高尙に過貌奄（バウエン）（Francis Bowen）のは偏する所あり革利里（グリーリー）（Horace Greeley）のは備はらず須利灣（シュリワン）（Sir Edward Sullivan）のは略に過ぎたり特り本書（John Barnard Byles）は……」

と書いてゐる所に、彼とスミスとの實際的交渉を想像させるものがある。

尙餘談乍らスミスの人物に就ても二三傳はいつて居る。極めて豪放なる性質であつて、副島外務卿・米國公使デ・ロングと意氣投合して、「肌脫ぎ外交（シャーツスリーブ・ディプロマシー）」を現出した。日常生活は日本人に擬して和服を着用し雙刀を帶びて外國人の危險視された市中を濶歩した（田保橋潔著明治外交史）廢刀令後も木刀の小さいのを腰から離さなかつた相である（中田敬義氏談）駐英公使寺島宗則は、五年九月二日ロンドンから副島外務卿に送れた外交上の意見書の一條にかう書いた。

「一、外務省スミス事不行狀頻ニ相聞（假令名言ありといへとも外務省之論不行事ニ至リ可申哉　其妾ニ袴ヲ着セシメ馬ニ乘セテ同行シ或ハ横濱市街ニ醉倒スルノ類無數　今ノ大使歸朝セハバークス等も歸り可申其彼カ醜ヲ鳴スニ無相違自今二年は雇ふへき事にて不得已ハ嚴ニ彼ニ禁酒ヲ命シ服セサレハ辭セシメテ諸シテ破棄するも同樣に約セラレテハ如何」（大隈重信關係文書第一　五一〇頁）

（一九三八・一〇・二六）

古版經濟書解題

一千八百三十二年版ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン著

『國家經濟研究』

高橋誠一郎

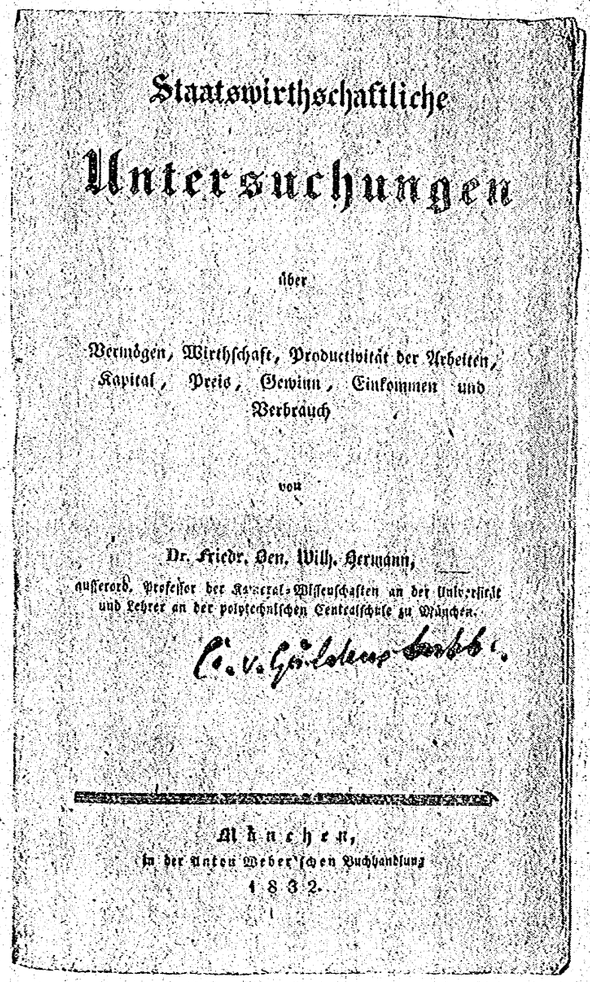
一

ヴィルヘルム・フォン・ヘルマン（Friedrich Benedikt Wilhelm von Herman）は一千七百九十五年十二月五日バイエルン、ディンケルスビュールに生れ、エルランゲンに於いて官房學講師（Docent der Kameralwissenschaften）としての資格を得、同地に於いて數學教師と爲り、同二十五年、ミュルンベルグの工藝學校の數學教授に擧げられ、同二十七年ミュンヒェン大學に於ける官房學の臨時教授（ausserordentlicher Professor）に任ぜられ、更らに同三十三年には正教授（ordentlicher Professor）の椅子に着き、同三十五年にはミュンヒェン科學學士會員と爲つた。彼れが同大學に於いて正教授に任命せらるゝを得たのは其の前年、即ち一千八百三十二年に出版せられた彼れの名著『國家經濟研究』（Staatswirthschaftliche Untersuchungen über Vermögen, Wirthschaft, Productivität der Arbeiten, Kapital, Preis, Gewinn, Einkommen und Verbrauch.）の好評なりしに由るものである。

古版經濟書解題

彼れは一千八百三十六年、政府によつて、工藝學校視學官、三十七年、最高敎務及び學務局員に任命せられ、又、一千八百三十九年には政府の命を受けて巴里博覽會を參觀し、其の記事 Die Industrieausstellung zu Paris im Jahre 1839. を上梓した。彼れは又、一千八百三十九年以來、バイエルン王國統計局員として活躍し、五十年には同局長に就任した。同國統計局は其の一千八百五十年の改造に由つて惟り普魯西の其れを除いては他の孰れにも劣らざるの地位に立つに至つた。ヘルマンは一千八百五十年より同六十七年に亙つて統計局長の資格に於いて統計的研究を刊行した。Beiträge zur Statistik des Königreichs Bayern. Nach amtlichen Quellen herausgegeben nach F. B. W. v. Hermann, Heft 1 bis Heft 17, 1850-1867. が是れである。彼れは一千八百四十五年には內務省參事官、一千八百五十五年には樞密院議員と爲り、一千八百五十二年に、維納に開かれた獨逸聯邦關稅會議其の他にバイエルンを代表して出席し、熱心に全獨逸國民的關稅及び通商制度を創設するが爲めに努力した。彼れは一千八百四十九年二月、「墺太利なくしては獨逸なし」（"Kein Deutschland ohne Oesterreich）を標語とする所謂大獨逸黨（Grossdeutsche Partei）を組織し、墺太利なき聯邦はより小なる獨逸を生ぜしめずして、より大なる普魯西を生ぜしむ可きことを主張した。彼れは一千八百四十八年ミュンヒェン市を代表してフランクフルト・アム・マインの國民議會に出席し、左翼中央黨の一員として投票し、墺太利を包含する全獨逸諸邦の統一を唱道した。

彼れは一千八百五十五年政界より退隱し、其の敎授職と學問的研究に盡瘁した。彼れは一千八百六十八年十一月二十日、肺炎に罹り、其の死期の迫れるを知り、其の氣力の許す限り、彼れの舊著『國家經濟研究』の新版に加へらる可き、變更の箇所を其の子に書き取らせた。同月二十三日、ミュンヒェンに逝く。『研究』の增訂版は彼れの控書を基としてヘルフェリッヒ（J. A. R. von Helferich）及びマイル（Georg von Mayr）の兩博士によつて整理せられ、兩者連名の一千八百六十九年十月十日附の序文を附し、翌七十年、單に Staatswirthschaftliche Untersuchungen. と題して出版せられた。茲には初版本の扉を寫眞版として揭げることゝした。


Staatswirthschaftliche
Untersuchungen
über
Vermögen, Wirthschaft, Productivität der Arbeiten, Kapital, Preis, Gewinn, Einkommen und Verbrauch
von
Dr. Friedr. Ben. Wilh. Hermann,
ausserord. Professor der Kameral-Wissenschaften an der Universität und Lehrer an der polytechnischen Centralschule zu München.
München,
in der Anton Weber'schen Buchhandlung
1832.

二

『國家經濟研究』はヘルマンの唯一の理論的著作であつて、彼れは此の書によつて獨逸經濟學に於けるスミス・セイ學派の最も永續的價値ある文獻を殘した。彼れは獨創に富める銳敏にして且つ周到なる推論家であつた。彼れはフォン・チューネン(von Thünen)及びフォン・マンゴルト(von Mangoldt)と共に、獨逸的分析の傳統が歷史學派によつて高潮せらるゝに至る以前に於ける其の表明者として傑出するものである。這般の傳統は先づスミスの『國富論』に對するジャン・バティスト・セイの解釋に基礎を有するものであるが、而も、そは又自國の哲學から幾分の影響を與へられなければならなかつた。ヘルマン等の以前に於いて效用理論は其の先蹤によつて既に著しく明瞭ならしめられ、發達せしめられて居つた。熱心なるカント學徒ゴットリーブ・フッフェランド(Gottlieb Hufeland)は全然カントの『純粹理性批判』の觀察方法を以つて進むと共に、主としてセイ及びローダデールの業績に追隨して、純然たる主觀的心理學的價値理論を展開した。(昭和四年版拙著『經濟學史』三〇一—二頁參照)。而して彼れよりも更らに、一切の價値を以つて人間精神の活動に基くと做すの意見を强調するものにヨハン・オイゼビオス・ロッツ(Johann Friedrich Eusebius Lotz)があつた。(同三〇三頁參照)。

ヘルマンは其の著の緒言に於いて、現在の經濟學の弱點を指摘し、而して、其の本文の初めに於いて、經濟學の根本概念及び原理に就いて述べ、先づ財を分つて、內部財及び外部財と做し、前者を以つて、各人が彼れ自身の天與の賜及び彼れが自動的に自己の中に生成する所のものと做し、後者を以つて、彼れが外界の援助を通じて欲望滿足の爲めに生產し若しくは取得するものと觀る。或る人の內部財は他人に對する外部財たることがあり得る。例へば、或る人が直接に言語、動作其の他によつて、若しくは間接に他の外部財と結合して是れ等のものを他人に享樂せしむるが爲めに交付する場合の如きである。(Staatswirthschaftliche Untersuchungen, 1832, S. 1.)。次いでヘルマンは價値、富、財產、等の諸概念の定義を構成し、之れを精確ならしむるに努め、各箇經濟の原理を以つて利己なりと做し、(a. a. O., S. 12.)、而して個人的利益が公共の福祉と撞着するに至ることが如何に頻繁であり、其の能く一般的幸福に貢獻し得る所が如何に不充分であるかを論證せる後に於いて、一身上の利害によつて動さるゝ個人的活動を以つて國民經濟の一切の要求に應ずるに足るものと做すスミス學徒の大多數によつて表明せられた學說に同意すること能はざる旨を宣言し、「共同心」も亦、一國民の經濟的發達の根本條件たることを主張した。(a. a. O., S. 15.)。彼れは實に自利心と共同心とに於いて經濟の二動機を看出したのである。而して彼れは所謂理論的國民經濟學を自利心の研究に、國民經濟政策を共同心の共れに基かしめんことをすら意圖したのである。

次いで、彼れは勞働の生產性に就いて論じ、技術と經濟とを峻別した。前者は一定の物理的原因の行使による一定の物理的結果の生產に關するものであり、後者は、最少犧牲を以つてする最大利得の原理に基ける財貨の數量の處理に關するものである。彼れは又、經濟的生產を(一)生產者の見地、(二)消費者の見地、及び(三)國民經濟全體の見地より論じた。生產者は彼れが其の國の當該職業に普通なる利潤率を以つて、彼れの資本の支出を回收する場合には、其の勞働を生產的と稱するの常である。消費者は彼れが其の給付を利用することを得、且つ相當なる價格を以つて之れを取得することを得る總べての種類の勞働に生產性を歸與する。最後に、全體としての國民經濟は市場に於いて賣り出さるゝ財貨の量を增加する總べての勞働を以つて生產的と看做すのである。(a. a. O., S. 27 ff.)。

三

第三にヘルマンは資本に就いて論じ、獨逸書の多數に於いても亦、アダム・スミスの說が祖述せられて居つたこ

とを認める。ザルトリウス、リューダー、フォン・ヤコブ、クラウスに於いて皆然りである。唯だザルトリウス及びフッフェランドは幾分獨自の見解を表明し、一財貨の資本として使用し得ること、其の直接に欲望を滿足するの力、即ち「生産價値」(Erzeugungswerth)と「使用價値」(Gebrauchswerth)とを區別し、フッフェランドは資本をして、初めて生産的放下を待つ所のものをも亦含めて、生産に使用せられ得る總べての財貨を抱擁せしめる。(a. a. O., S. 47.)。ヘルマンを以つて觀れば、「土地」(Grund und Boden) はそが所得を生ずる間持續する財貨たること明かなるが故に、之れを資本の下に置くことなきは不可思議である。(a. a. O., S. 48.)。根本的事實は生産を助成する財貨の蓄積であるが故に、費用は資本の至要なる方面ではない。ヘルマンは又、土地と資本の間に區別を設くることなき他の理由として實際上是れ等のものゝ間に區別を設くるの眞實の困難を提示する。土地は自から果實を與ふる自然力を有するも、固定資本は惟り其の效果を勞働に負ふと稱せられる。而も勞働なくしては極めて僅少の土地の果實が與へらるゝに過ぎず、他方に於いて、固定資本による勞働の總べての援助は結局自然力の適用及び利用に歸するのである。(a. a. O., S. 50.)。

ヘルマンは所得の見地よりして資本の概念に到達する。アダム・スミス及び其の他の人々は所得を以つて費用以上に出でたる生産的勞働の收益の殘餘なりと做してゐる。然しながら、彼れを以つて觀れば、所得は實際に財產の利用であつて、生産は生産者に對する資本收益の關係に於いては、資本部分の媒介を通じて一の財產所有者に屬する其の所有物の直接利用を彼れに取つて更らに便宜なる形態と交換するに外ならざるものである。(a. a. O., S. 57.)。彼れに從へば、資本は交換價値を有する利用のあらゆる持續的基礎である。彼れは一個人の財產即ち彼れが所有する外部財の高は(一)消費準備品及び(二)資本であつて、後者は(イ)住宅、家具其の他の如く、人が其の利用を直接に享樂する使用資本(Nutzkapital)(ロ)人が交換財として價値の他の對象と交換するが爲めに利用し、斯くて間接に享樂する營利資本(Erwerbkapital)とに分たれる。營利資本は更らに(a)貸付資本(Leihkapital)及び(b)生產資本(Productivkapital)に分たれ、後者は又(aa)固定(stehendes oder fixes)及び(bb)流動(umlaufendes oder circulirendes)の二者に分たれる。固定資本の場合には、單に其の利用のみが生產物に移り、流動資本の場合には、資本其の者が生產物に變移する。(a. a. O., S. 59-61.)。

彼れに從へば、土地、建物、家具、書籍、貨幣は持續的使用價値を有する。是れ等のものゝ使用は其の利用(Nutzung)と名附けらるる可きものであつて、そは是れに由つて、其の持續する間は、利子と稱せらるゝ交換價値を其れ自身に對して收得し得る本然の財貨として認められ得可きである。(a. a. O., vermehrte und verbesserte Aufl., 1870, S. 109.)。彼れは資本を生產財若しくは賃銀基金と同一視せる彼れと同時代の人々と背馳する。斯くの如き資本の定義は、ブレンタノ(Lujo Brentano)が一千八百七十一年の Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Bd. XVI. に揭げた Die Lehre von den Lohnsteigerungen mit besonderer Rücksicht auf die englischen Wirthschaftslehrer. 及び其の一千八百七十二年の著 Zur Kritik der englischen Gewerkvereine. に於ける賃銀基金說排斥の基礎と爲れるものであつて、今や多數の權威によつて承認せらるゝ所のものである。而して、そはヘルマンをしてセイの利子に關する生產力說をビーン・バヴァークの所謂「利用說」に變ぜしめ、レントが自然的稀少に基く場合を除いては、之れと利子との間の區別を廢除するに至らしめたのである。

四

第四にヘルマンは價格に就いて論ずる。彼れの價格理論は是れよりも以前に行はれた最も傑出せる大陸經濟學者

等の研究の結果を綜合する需要及び供給の要素の周到なる分析である。彼れは當時の價格理論を以つて缺點多きものと觀た。彼れを以つて觀れば、特殊價格の決定に參加する諸要素は、當時の經濟學によつて明快且つ完全に表示せられて居ない。是に於いて乎、彼れは其の先輩よりも更らに精緻なる注意を以つて、需要及び供給を分析して、價値及び價格決定に於ける特殊要素を論述した。雙方的競爭の作用する際には、市場價格は需要及び供給に由つて決定せられる。而も需要は三個の主たる要素に依存する。(一)欲求せらるゝ財貨の使用價値、(二)欲求者の支拂能力、(三)欲求せらるゝ財貨の他の方法に依る取得費、即ち或る他の市場に於いて之れを購入し、若しくは之れを生産する最低の費用が是れである。第一第二のものは買手に對する價格の主觀的限界を構成し、第三のものは其の客觀的限界を形成する。是れ等のものは價格に對して上部の限界を置くものである。(a. a. O., S. 67-76.)。供給側に於ける要素は、(一)費用、(二)他の方法に依る販賣價格、(三)價格財(Preisgüter)の交換價値、即ち價格と爲つて現るゝ其の財貨の交換價値である。是れ等のものは價値に對して下部の限界を設くるものである。(a. a. O., S. 76-96.)。彼れは是れ等要素中の費用を述ぶるに際して、價格の變化と費用との交互作用を論じてゐる。(a. a. O., S. 82-88.)。彼れは、再生産し得る財貨に取つては、費用を以つて決定的のものと考へてゐるが、而も需要に對して重要なる地位を與へてゐる。(a. a. O., S. 95.)。ヘルマンの理論は主として短期的價格の其れである。而して、そは發達せる價格均衡の概念を缺いてはゐるが、而も、貨幣的要素、即ち供給側に於ける貨幣價値、需要側に於ける所得分配及び價格水準、並びに市場組織と等しく主觀的評價をも亦注意してゐる。

ヘルマンは勞働費用價値學說に對して鋭利なる批評を加へてゐる。彼れに從へば、勞働は、其の生産上に資本が要部を占むる生産物に對しては、直接の關係を有することなく、勞働者が、勞働の供給の增減に由つて、利潤率と

共に其の生活資料の價値の變化に對抗し得る限りに於いてのみ、唯だ間接に之れに關係を有するに過ぎない。加之、幾分價値の尺度たるに適する財貨は、兩要素財、即ち勞働及び資本を含有し、斯くて是れ等の兩者と共に直接に其の價格に於いて變じなければならぬ。(a. a. O., S. 131.)。任意の高に於いて再生産し得ざる交換財は頃末なるものであると做すは誤つてゐる。土地は這般の項目中に屬する。而して其の價値若しくは寧ろ其の利用價値は總べての他の生産物の費用及び價値の上に重要なる影響を及ぼすのである。又、縱令ひ機械其の者が勞働を含有するとしても、そは全く加工せられたる素材に移るものと思惟せらる可きではない。單に其の機械が使ひ果されたる限りに於いてのみ、そは素材として思料せらる可きである。大體に於いて、其の機械中に結合せられたる勞働及び資本の利用は流通外に撤し去られて、單に利用の基礎たるに過ぎないのである。若し、勞働費用が價値を決定し、相等しき勞働を含有する財貨が相等しき條件を以つて交換せらるゝとしたならば、啻だに2aの勞働がa勞働の二倍を購入するのみならず、a勞働は常にa勞働と交換せられて其の以上と交換せらるゝことなきの結果を來さなければならぬ。然るに、各々の生産物は其れ自身の含有するよりも以上の勞働と交換せらるるn勞働が生産物B中に於ける$\frac{n}{54}$勞働と交換せらるゝとしたならば、B中に於けるn勞働は如何にして同時にA中に於ける$\frac{n}{54}$を購ひ得るのであるか。素材及び生活資料なくしては、新たなる勞働は所要の生産物を供給することを得ないと主張せらるゝならば、是れに由つて勞働以外に猶ほ一要素、即ち資本の利用が生産物の産出に取つて必要であることが承認せられなければならぬ。而して其の生産物が其の含有する勞働よりも高き交換價値を有するとしたならば、這般の資本の利用が啻だに利用價値のみならず、交換價値をも亦有することが是れに由つて自から明かと爲るのである。若し吾人が事實這箇生産物の第二要素を眼中に置くことなく、兩生

産物に於ける資本利用を同一と假定したならば、勞働はよく生産物の交換價値を決定するものと思惟せられ得可きである。然しながら、之れが利用は二生産物に於いて實際上殆んど同一なることがない。實にマカラックによつて表明せられたるが如きリカードオの法式は單にA＝Aなりと云ふに過ぎざるものであつて、交換價値の本體は是れに由つて說明せらるゝことがないのである。（a. a. O., S. 133-134.）。

五

第五にヘルマンは利潤に就いて論ずる。セイは、其の手中に生産的諸力を集合する者であつて、英國經濟學者によつて「資本家」（Capitalist）なる術語を有する名稱を以つて呼ばれて居つた者の最も重要なる經濟的職能を表示するが爲めに初めて「企業家」（entrepreneur）なる名稱を使用し、而して其の利潤を論じたのであるが（Traité d'économie politique, ou simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent, et se consomment les richesses, tome ii, 1803, p. 221 ff.）獨逸に於いては夙にフォフ ランドは其の Neue Grundlegung der Staatswirthschaftskunst durch Prüfung und Berichtigung ihrer Hauptbegriffe, 1 Teil, 1807.）に於いて、企業家の利得を以つて、半ばは危險に對する補償、半ばは企業家の才幹及び手腕に對するレントより成るものと做し、カール・ハインリッヒ・ラウ（Karl Heinrich Rau）は其の Lehrbuch der politischen Oekonomie. の第1卷 Grundsätze der Volkswirthschaftslehre, 1826. に於いて、企業家の利得を以つて、資本及び勞働間の內部關係より生ずる特殊の所得であつて、其の中に於いて是れ等兩泉源の分前は分割し得ざるものと做してゐる。ヘルマンは更らに此の點を闡明せんとする。

彼れに從へば、n月間其の所有主の直接使用からa資本を撤去する一の生産物は、b資本をm月間使用せる他の生産物よりの利潤に對する、即ちanがbmに對するに等しき比率を有す可き餘剩を資本支出以上に其の價格に於いて齎さざるを得ざるものである。（a. a. O., S. 147.）。彼れは、土地を包含する資本の實際的勤務、即ち彼れの所謂利用が稀少であつて、斯くて又、レントとしての是れ等のものゝ支拂が一の生産費であることをセイと同じく主張する。（a. a. O., S. 151-199.）。而して、企業家の本然の所得は、一の目的に對して總べての營利手段を集合し、經營に對して一の計畫を設定し、あらゆる人に與へられてゐない營利業務の管理に必要なる能力及び才幹を供給し、又、彼れの利得が生産物の價格の動搖に依賴しつゝあるに拘らず確定せる利率を保證するの任務に對する報酬である。而して總べて是れ等の勤務は包含せらるゝ資本の高と共に變化する。斯くて企業家の利得は是れ等の勤務、管理及び危險に對する必要なる報酬である。企業家の利得部分は（a）賃銀、小工業に於ける企業家の努力に對する補償と區別せらる可きものであり、且つ（b）そは又、總べての危險に對する賠償から區別せらる可きものである。斯くの如き賠償は全然所得ではなくして、常に眞の利得から愼重に分離せられなければならぬ。そは將來の損失に對して蓄積せざるを得ざる資本である。斯くの如き部分を所得として消費する工業家は其の基本財産を減少する。（a. a. O., S. 204-205.）。

所有者が自ら使用することを欲せざる資本の高は企業家の勤務に對する需要を構成し、資本を生產的に投下せんとする者の數は其の供給を決定する。斯くて企業家の勤務と所得とは包含せらるゝ資本の高に關係を有するが故に、一定の總利潤が假定せらるゝならば、企業家の利得は利子の高と共に變化し、利子が昂騰すれば、彼れの利得は低下し、利子が低下すれば、彼れの利得は昂騰する。（a. a. O., S. 208.）。

六

ヘルマンは次いで再び資本を論じ、固定資本に對する收益が、總收入と本原的費用及び置換費との間の相違であつて、其の當時の利率よりも以上若しくは以下なることある可きを指摘する。彼れは斯くの如き收益を一のレントとして分類する。固定資本の一部が所有者を換ふると共に、そは市場に於いて、這般の投資の方面に特有なる危險其の他に對して斟酌を行ひて、當時の利率によつて此のレントを割引するによつて評價せらる可きである。斯くて、所有者を換へたる後に於いては、此の固定資本に對する收益は、あらゆる他の資本の使用より取得せらる可き收益と一列ならしめらる可きである。固定資本の購入者は自由資本の所有者であり、自由資本に對しては市場は完全に競爭的なるが故に、必然斯くの如き結果が生じなければならぬ。斯くの如きは、利率を決定するに於いて重要なるものが、自由資本に對する市場に於ける支配的事情であることを明かならしめる。自由資本の供給は制限せられ、而してそは投下せらるゝ本源的の高以上に收益を生ずることを期待せらるゝ多數の交替的方向に投下せらるゝことが出來る。前以つて投下せられたる固定資本は、そが所有を換ふるとするならば、自由資本の投入に對する競爭的機會と同一の收益を生ずるが如き方法に於いて評價せられなければならぬ。斯くの如きは本源的所有者に對する資本の損失若しくは利得に終る可きである。流動資本は當然固定資本よりも當時の利率を生ずるの傾向大なる可きである。蓋しあらゆる不足は固定資本の上に投げ掛けらるゝが故である。(a. a. O., S. 266-289.)。

彼れは同じく資本の作用を論ずるに際して、種々なる根據よりして當時英國に行はれて居つた賃銀基金說に反對した。年代順から言へば、英國學者の傳統的賃銀理論から離れた最初の人は彼れヘルマンであらう。彼れはアダム・スミスが、資本と等しく所得を以つて賃銀の支拂はるる泉源たらしめたことを擧示して之れを稱揚してゐる。(a. a. O., S. 280.)。然も、彼れによつて行はれたる一定の叙述並びにラウ (Volkswirthschaft, §. 202. und 203 und §.

296. und 207.)及びマカラック(Principles etc., p. 104 u. 105. 2. Ed.)等の學說に從へば、勞働を求むる者の數と資本の量とは賃銀を規制するものであり、資本に比して民衆が甚だ多ければ、賃銀は低く降り、反對の場合には、資本家に對して單に僅少なる所得を剩すに過ぎざる迄に昂騰するを得可きである。然も、ヘルマンを以つて觀れば、(一)縱し賃銀が流動資本部分に依存することが是認せらるゝとしても、資本全體に關しては何等の意義をも有せざるものである。總資本のより大なる部分は固定せしめられて、更らに其れ以上に勞働者の賃銀支拂に使用せらるゝことなきを得可きである。(二)屬人的の勤務を爲し、消費者の所得から直接に支拂はるゝ勞働者の數は看過せらるゝには餘りに大である。企業家が勞働を購入するは消費の爲めに非ずして、生產物の形態に於いて再賣するが爲めである。資本は特に賃銀の支拂はるゝ眞の泉源ではない。之れが眞の泉源は勞働者によつて生產せられた物を購入する者の所得、略言すれば消費者の所得である。而も總資本の增加はより大なる產物に對する需要を生ぜしむるに於いて賃銀の狀態に對して間接の影響を有するものである。(Hermann, a. a. O., S. 280-282.)。

彼れの意見に據れば、賃銀は資本によつて規制せらるゝと做す經濟學上の一般に普及せる誤謬は其の勞働者に對する工業企業家の驕慢なる態度を助成するに資する所が尠くなかつたのである。賃銀支給者は自己の所得（勞働若しくは利用）を以つて勞働者の給付と交換すると云つても、彼れ等は全然平等に對立するものである。彼れ等は實に賃銀に對する全對價を保有するが故に、勞働者を給養するものと自負することを得ない。却つて工業的企業を行ふ者は再賣の目的を以つて勞働を購ふに過ぎざるものであり、單に消費者に對する勞働の眞の販路を容易ならしむるに過ぎない。消費者は實際に先づ之れに對して賃銀を支拂ふのである。彼れは斯くの如き事業に其の流動資本を供用し、之れを自ら利用することなきに對して利潤を以つて賠償を受くるのである。斯くて、彼れは斷じて勞働者

を給養するものではなく、却つて自己の資本利用の一部の一層有利なる實却に勞働の供給を利用するに過ぎない。勞働者及び企業家は互に其の一方的給付の交換を、各々に對してより有用なる形態に移ることを容易ならしむるものであり、斯くて又、平等なる地位に立つものである。(a. a. O., S. 283-285.)。

斯くの如く、彼れは本書の初版に於いては、賃銀は資本に依頼すると做すの學說を有害なりと做すの理由を、企業家等が斯くの如き學說に教へられて、自己を以つて賃銀の眞給與者と思惟し、是れに由つて恩典と奬勵金とを受くるの權利ありと思惟するに在りと觀たのであるが、前揭一千八百七十年の再版に於いては、其の理由を、無學の勞働者が斯くの如き學說に教へられて、賃銀の泉源は企業家の資本に在りと看做し、斯くて又、彼れ等をして無謀の同盟罷業を行はしむるに在りと說いてゐる。(Staatswirthschaftliche Untersuchungen, Zweite nach dem Tod des Verfassers erschienene, vermehrte und verbesserte Auflage, 1870, S. 477.)。洵に是れ等兩版の間に存する期間中に於ける社會狀態の變化が如何に著しかつたかを想見せしむるものがある。

〈ルマンの時代以後、獨逸人の手に成つた賃銀の問題に關說せる經濟學上の著書であつて、其の中に彼れの所論の影響が或る程度まで認められないものは殆んど無つたのである。リースラー(Karl Friedrich Hermann Roesler)の一千八百六十一年の著 Zur Kritik der Lehre vom Arbeitslohn. に於いては、雇主の資本は勞働者に取つて無關係なるものであつて、勞働者は其の賃銀を偏へに消費者より引き出すものであり、雇主は單に仲介人に過ぎざるものであると云ふ意見が强調せられた。(a. a. O., S. 141.)。歷史學派の長老ウイルヘルム・ロッシャー(Wilhelm Roscher)も亦、其の Die Grundlagen der Nationalökonomie. Ein Hand- und Lesebuch für Geschäftsmänner und Studierende, 1854. に於いて、〈ルマンの意見を採用した。(a. a. O., S. 294 ff.)。

更らに〈ルマンは第七に所得に就いて論じ、最もよく之に關する理論を展發せしめ、而して經濟の主眼として欲望の滿足を强調する。(a. a. O., S. 294 ff.)。彼れは第八に財貨の消費に就いて述べ、消費の概念、消費に於ける過程、財貨の使用との關係・消費者の經濟との關係並びに國民經濟全般との關係に於いての消費を觀る。(a. a. O., S. 327-374.)。

死後の增訂版に於いては本書の編次は改められて、(一)基礎(二)欲望(三)財貨(四)經濟(五)生產(六)價格(七)賃銀(八)利潤(九)所得及び(十)財貨消費と爲つてゐる。